

中国を見て・感じて・探る…大連事務所発のレポート

大連のネットニュース「天健ネット」より

大連:春節の“爆竹ゴミ”が 1250 トン

一年に一度の春節が爆竹の音とともに過ぎ去った。大みそかから旧暦 7 日までの“爆竹ゴミ”は約 1250 トンで、ここ数年の統計量からみると年々減少の傾向にある。統計では、元旦早朝の回収量は 850 トンで、昨年 1100 トンより減少。旧暦 7 日午前の回収量は 400 トン以上で、昨年 700 トンより減少。これは「大連日報」が伝えた。

春節の期間中、大連市区大気汚染指数(APT)は 52~103 であった。旧暦 1 日は軽度汚染で、主要汚染物は二酸化硫黄である。汚染は主に大みそかの花火や爆竹及び無風天気が大気拡散能力を無くしたことによる。2月 19 日まで、大連市区の大気の質が「優」であった日が 5 日で例年に比べ 2 日減少。「良」であった日は 44 日で例年に比べ 1 日増加。「軽度汚染」は 1 日で例年に比べ 1 日増加。

中国のお正月は旧暦で、今年は 2月 14 日だった。この記事にある大みそかは、2月 13 日を指している。この 1 週間前を小正月といい、そこから一気に正月ムードが高まる。

当然、気分が高まるとともに、なぜか花火が上がりだす。どこのだれが花火を打ち上げているのか分からないが、昼も夜もどこかでパンパン音がしている。そのクライマックスが 2月 13 日の夜だ。

大連では、大きな通りが花火打ち上げ場所として指定される。通りに、灯油缶ぐらいの大きさの花火を並べ、次から次へ打ち上げる。ある人が終わると、また次の人が並べ、また打ち上げる。この感じで、次からつぎへと 13 日の午後 7 時ぐらいから 14 日の午前 2 時過ぎまで花火が上がり続ける。

この灯油缶ぐらいの花火は、16連発～32連発で、1個5000円～1万円で販売されている。新年が近くなると、花火打ち上げ指定場所の近くの商店が、正月前には花火屋さんになり、誰でもお金さえ払えば打ち上げ花火が購入できる。

日本では、消防の許可など手続きが複雑だろうが、中国ではそのようなものは全くない。そんなことで、本当に火事は起こらないのか？と思うのだが、実際、火事は発生していて、それに備えて消防が待機している。新年のニュースでは、火事に備える消防署員や、花火のゴミを徹夜で掃除する清掃員が、新年の英雄であるかのように報道されている。

昨年、北京の国営中国中央テレビ（CCTV）の新社屋に付属する234メートルの高層ビルが、春節の花火が原因で灰になった。しかし、政府が花火を禁止するような動きは見られなかった。中国人にとって春節の花火は、どんな危険を冒してもやらなければならない大切な年中行事のようだ。

中国では昔から、爆竹を鳴らすことで、「悪運が払われ、鬼を寄せ付けない」ことができると信じられているようだ。日本では、節分に豆をまいて鬼を退治するが、中国ではもっと強力な火薬を使って追い払っていたのだろうか。

現代的な解釈では、企業や商店などが、「今年は儲かったよ」という意味をこめて派手な花火を打ち上げると言われている。これも、中国らしい考え方で、金持ちは派手にお金を使うことが社会貢献だと思われている。政府もそのことを奨励していると、民衆から思われていて、中国的な内需拡大の有効策だと考える人もいる。

真実がどこにあるかは置いておいて、派手なことが大好きな中国人は、正月に競うように花火を打ち上げる。まるで、経済成長と好況の証であるように夜空を彩る花火は、今の中国の象徴にも見えてくる。中国の春節は、日本人から見ると驚かされることばかりで、中国人の本質を体感できる興味深い日だ。